

# かつぬまのあれなんだ？これなんだ？



山梨大学大学院総合研究部生命環境学域菊地研究室  
岩田 美耶 文・絵  
監修

# 日本一のブドウ郷「勝沼」

かつねま 勝沼は、日本を代表するブドウやワインの産地なんだよ。

どりいびら 鳥居平からまちを見おろしてごらん。東の山々が甲府盆地へと変わっていくゆるやかな斜面にブドウ畠が広がっているね。真っすぐに流れる日川に沿って、家々が並ぶ様子も見えるかな。

かつねま 川は山から土を運んでくるんだよ。長い年月をかけて日川がつくった勝沼の大地は、水がしみこみやすいんだ。雨も少なく、日があたりやすく、農家の愛情と一緒にブドウをやさしく育てくれるんだけど、夕方になると笛子峠から冷たい風が吹いてきて、おいしいブドウにきたえてくれるんだ。魔法みたいだね。

えどじたい 江戸時代には、田んぼも広がっていたんだ。網の目のように流れすいろる水路は、そのことを伝えているんだよ。明治、大正、昭和と時代うつが移る中で、ブドウ畠に変わっていったのは、どうしてだろう。

こうふばんち 甲府盆地の一番東にある勝沼は、東京からの玄関口になってえどじだい いるんだ。江戸時代に甲州街道の宿場・勝沼宿がおかれ、多くこうしゅうかいどう の人や物が行き来する場所になつたんだよ。大正時代にはじゅくば かつねまじゆく 鉄道の駅もできたんだ。そんな中で、勝沼のブドウはたくさん的人たいしょじだい しゅつかさき に知られ、出荷先も広がつていったんだね。観光ブドウ園も増えかつねま かんこう たんだよ。

かつねま こじん しゅうらく 勝沼では、日本でワインが広まるずっと前から、個人や集落でブドウのお酒を作っていたんだ。明治時代になって、日本で最初にさけ めいじじだい さいしょ しゅ かつねま ぎじゅつ ブドウ酒の会社ができたのも、勝沼なんだよ。フランスから技術を学んだりもしたんだね。まちを歩いてごらん。家々の間に、小さなワインじょうぞうじょう 釀造場を見つけることができるから。

このほかにも、ブドウやワインづくりの今と昔を伝えるものが、いろいろあるんだよ。次のページを開いて見ていく。

な  
かつぬま  
ふうけい  
みんなが見慣れている勝沼の風景。

じつ  
ちが  
実は、今と昔で違うところがたくさんあるんだ。

かつぬま  
勝沼には竹があちこちに生えていることを知ってる?



かつぬま  
昔の勝沼がどんなところだったのか、  
ちょっとだけのぞいてみよう。



りよう  
昔はこれを、上手に利用していたんだよ。  
何に使っていたのかな?

昔はね、竹はブドウ栽培に欠かせないものだったんだ。

ブドウ栽培の中心となるブドウ棚は、今では針金でつく  
られているけど、昔は竹でつくられていたんだよ。



ダンボールが無い時代、竹でつくられた「かご」  
に入れてブドウは出荷されていたんだ。

道の分かれ目に大きな石があるね。

「馬頭観音」って書いてあるけど…



かつぬま ばとうかんのん い  
勝沼における「馬頭観音」の云われってなんだろう?



じどうしゃ  
まだ自動車がない時代は、馬がブドウを運んでいたんだよ。

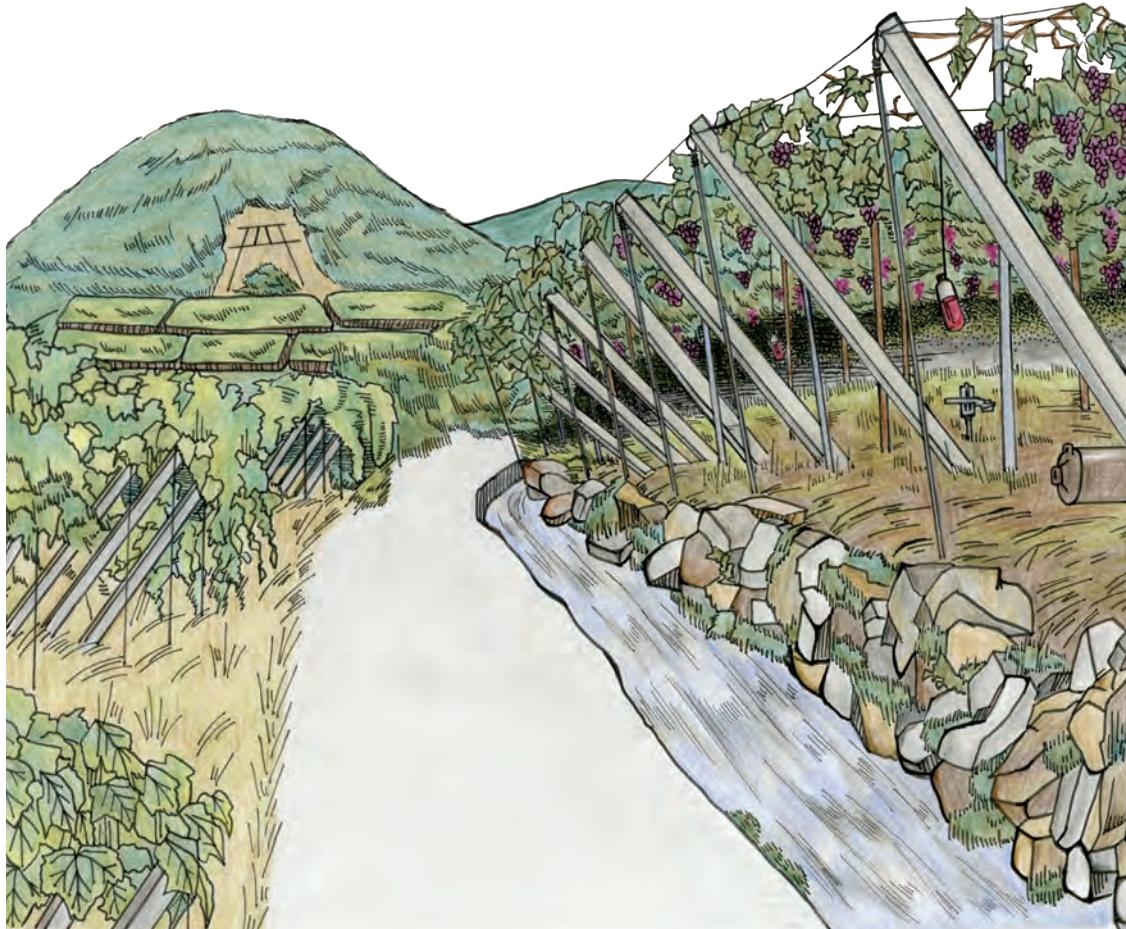
あつ びょうき たお  
ときどき暑さや病気で馬が倒れてしまうことがあったんだ。そう

くよう ばどうかんのん  
やって死んでしまった馬を供養するため馬頭観音をおいて

かつぬま  
いると、勝沼ではいわれているよ。

かつぬま  
勝沼を歩くと水の音がするね。

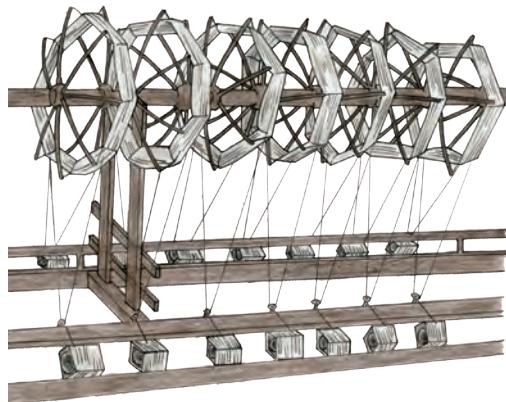
かつぬま すいろ なが  
これは勝沼のあらゆるところにある水路に流れる水の音。



すいろ ちいき なが  
水路の水が地域全体に流れているのはどうしてだろう?

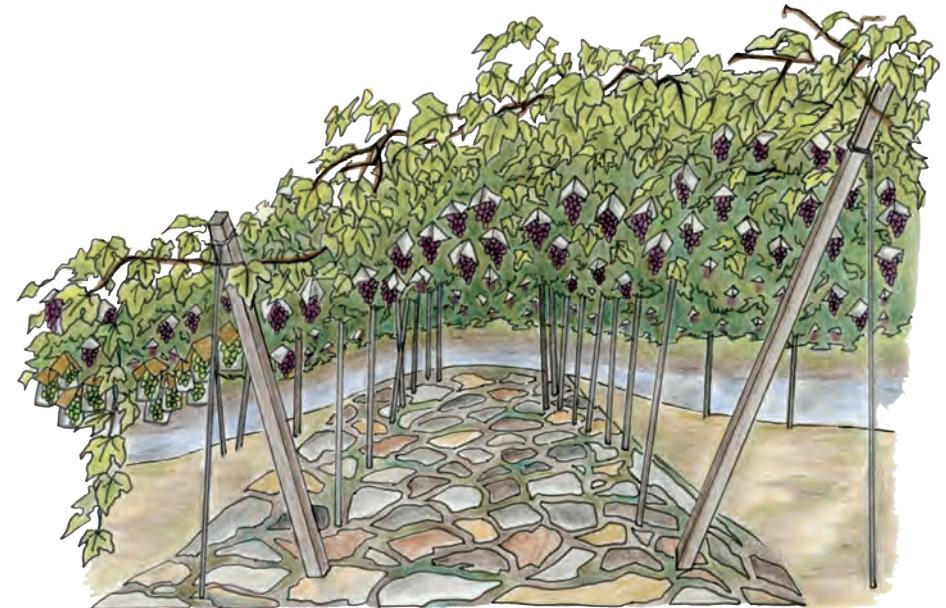
つか  
この水は何に使われているのかな?

すいろ なが かつぬま え  
水路が流れているのは、勝沼では川からしか水を得られない  
からだよ。水がないとブドウが育たなくなってしまうから、ブドウ  
さいばい そだ ふせ ぱたけ  
栽培には欠かせないものなんだ。



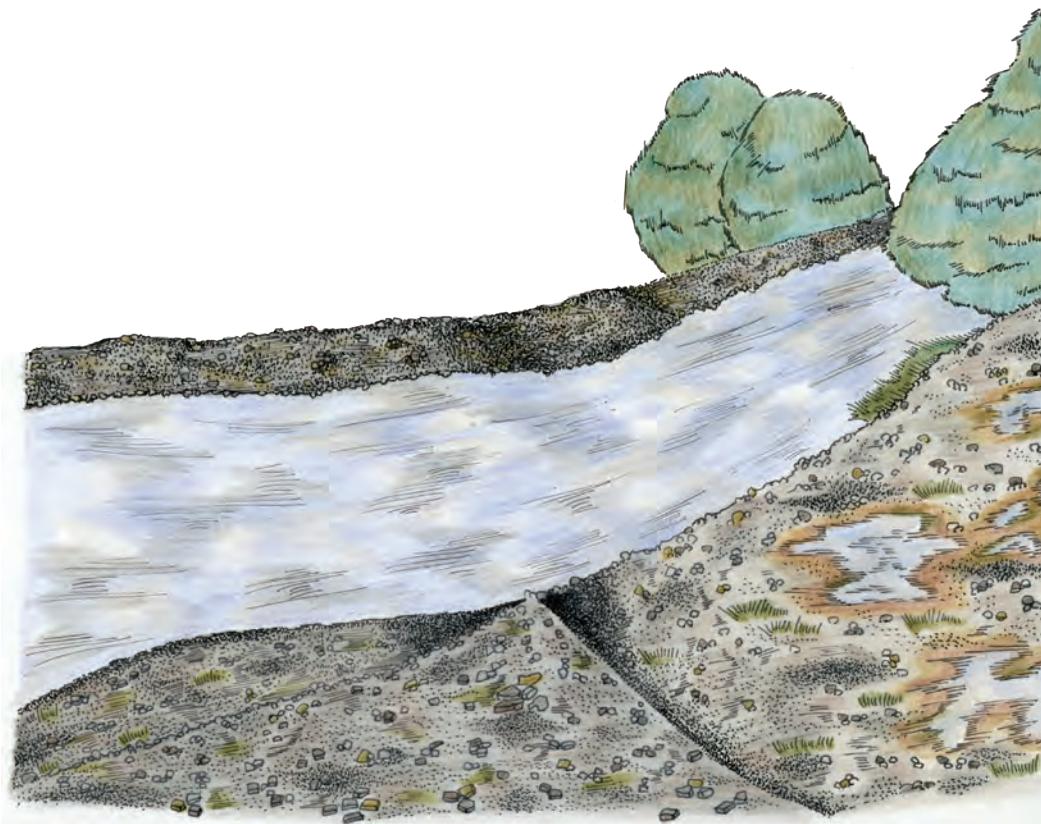
かつぬま さか せいしそう  
でもそれだけではなくて、かつて勝沼で栄えていた「製糸業」  
つか すいろ ちえ  
にも使われていたんだ。水路の水で水車を回し、その力で  
糸をつむいでいたんだよ。昔の人の知恵はすごい!

すいせい  
水制って知ってる?  
これは、大雨で川が広がって畠が流されてしまうの  
ふせ づ  
を防ぐためにつくられた石積みなんだ。実は、この  
すいせい ぱたけ  
水制がブドウ畠の下にあるんだよ。



まわ ぱたけ  
もしかして、昔は日川の周りにブドウ畠はなかったのかな。

昔、日川の周りは砂利だらけの河川敷だったんだ。



ブドウを収穫すると、出荷や販売されるまでの間、ブドウ  
冷蔵庫で保管するね。現在使われているブドウ冷蔵庫  
は、電気を使ってブドウを冷やしているんだけど…。



大雨が降ったとき、川の水を止めるものがないとあふれてしまうね。

だから日川の周りには水制がつくられていたんだね。

電気のない時代はどうやってブドウを冷やしていたんだろう？

れいぞうこ つか  
昔もブドウ冷蔵庫は使われていたんだ。

ちが  
だけど、今とは違って石やコンクリートでつくられていたんだよ。

すいろ れいき  
また、電気ではなく、地下水や水路の水の冷氣でブドウを  
ひ かつやく  
冷やしていたんだ。ここでも水路の水が活躍しているね！



かつぬま  
勝沼ではワインもつくっているよね。

そそ  
大人のみんなはグラスにワインを注いで楽しんでいるね。



昔、ワインはどんなふうに飲んでいたのかな？

ひん  
ワインの瓶は今と同じ形だったのかな？

昔、ワインの瓶は今よりも大きな、一斗瓶や一升瓶だったんだ。

一斗瓶はワインを保存するために使っていたんだよ。



ワインを飲むときは一升瓶に詰め替えて、大勢でワインを

楽しんでいたんだよ。一升瓶のワインは今でもあるけど、

山梨県でしか売っていないんだって！

—— 今日は10月第1週の土曜日。

勝沼中央公園では、ぶどうまつりがぎやかに開かれている。

陽がしづんで、あたりはすっかり真っ暗に。

あれ？

一筋の光が鳥居平に登っていくのが見えるけど…

あの光は一体なんだろう？



かつぬま せいひ せいかたい  
光の正体は、勝沼中学校の生徒による聖火隊。

か とりいやき とも  
ぶどうまつりに欠かせない鳥居焼に点火する火を灯してくれるんだ。

とりいやき かぎ てんとうてき  
鳥居焼はぶどうまつりのフィナーレを飾る伝統的なものなんだよ。



か 昔とは変わってしまうものもある中で、  
か う つ ちいき ぶんか  
今も変わらず受け継がれている地域の文化もあるんだね。

## 竹利用

勝沼を歩くと、斜面のいたるところに竹が生えていることに気づく。

かつて、竹はブドウの栽培や出荷に欠かせない材料であった。棚やかごの材料などとして用いられ、竹材を加工する職人も多くいたという。

棚材は針金・ステンレスに、かご材はダンボール、プラスチックに変わったが、地域の竹林は勝沼地域のブドウ栽培の歴史を今も物語る。



## 川

明治40年、明治43年に山梨県内を襲った大水害は、日川流域にも甚大な影響を及ぼした。

水害後、日川流域には勝沼堰堤(大正6年竣工)、日川水制(大正4年完成)という2つの治水施設が国(内務省)直轄工事として建設された。

その後、水制は河川によって運ばれた多くの土砂によって埋没してしまった。その結果、水制が築かれた場所は、現在、一面のブドウ畠となり、水制の痕跡はブドウ棚の下で受け継がれる。



明治の大水害(岩崎方向を望む)  
[所蔵:尊福寺]



勝沼堰堤



日川水制の建設(大正時代)  
[提供:土木学会附属土木図書館]

## 水利用



菱平の馬方井戸

馬頭観音

かつて、ブドウやワインの輸送には馬が使われた。そのため、坂道を登る馬のために、道の脇には馬のための水飲み場がつくられていた。また、馬の供養のための馬頭観音も数多くつくれられ、今も受け継がれている。



水車に導水するための堰止溝跡

## 運搬



ブドウ畠のなかに残るブドウ冷蔵庫▲  
◆ブドウ冷蔵庫の内部(大正時代)

## ブドウ冷蔵庫

ブドウ冷蔵庫はブドウの保存と出荷時期の調整を目的に作られた。

元々は斜面を掘り込んで造られたが、ブドウから発生するガスが有害なため、半地下構造となり、煙突からガスを排出した。

## ワイン瓶

ワインの容器は地域の生活とともに変化してきた。湯呑みでお茶感覺でワインを飲んでいた時代、一斗瓶で保存したのち、一升瓶に移し替えて湯呑みに注がれた。四合瓶は、勝沼ぶどうの丘が開業\*した頃、ワイン出荷の本格化とともに普及した。

\*昭和50年(1975)



1合=180ml / 1升=1800ml / 1斗=10升=18000ml

# 文化的景観とは

「文化的景観」とは、土地にひとが暮らし、生活や仕事を営むなかで、地域の自然や地形を巧みに利用したことにより生み出されてきた景観のことをいいます。山間や海辺の農山漁村、あるいは町場の商家町など、身近にある何気ない景観すべてが私たちの生活の記憶であり、大切な文化的景観です。

地域固有の自然や文化のなかで育まれてきた景観、さらにそれを形成してきた地域のシステムに価値を見いだし、地域で守り、受け継ぐための仕組みが、国の文化財のひとつとしても位置づけられている「文化的景観」なのです。



遊子水荷浦の段畑（愛媛県）  
海辺の急峻な段々畑にじやがいも畑が広がり、半農半漁の営みが続く。



大沢・上大沢の間垣集落景観（石川県）  
海に面した集落の外周部では、高さ4～5mのニガタケを立てた「間垣」を設置し、季節風をしのいでいる。



高島市針江・霜降の水辺景観（滋賀県）  
湧水が集落内で自噴し、それを利用した「カバタ」と呼ばれる水場・洗い場が各家で現在も使われている。



別府の湯けむり・温泉地景観（大分県）  
世界一の湧出量ともいわれる温泉資源が、地域にさまざまな生業を生み出している。

2020年 2月 28日 発行

勝沼のブドウ畠及びワイナリー群の文化的景観  
かつぬまのあれなんだ？これなんだ？



監修 山梨大学大学院総合研究部生命環境学域菊地研究室

文・絵 岩田 美耶

発行 甲州市・甲州市教育委員会

〒404-8501 山梨県甲州市塩山上於曽1085番地1  
電話 0553-32-5076

□本書は、『勝沼のブドウ畠及びワイナリー群の文化的景観調査報告書』(甲州市・甲州市教育委員会、2019年3月)の学校教育向け概要版であり、令和元年度文化庁国庫補助事業(文化的景観保護推進事業)及び山梨県文化財保存事業の一部として刊行するものである。

□文化的景観価値評価のための調査及び前掲報告書の執筆は、平成28年度～30年度に甲州市教育委員会、山梨大学、山梨県立大学、工学院大学が実施した。

□本書は、甲州市教育委員会文化財課と協議の上、文・絵は岩田美耶(山梨大学生命環境学部)が作成し、菊地淑人(山梨大学准教授)が監修をおこなった。

□巻末の解説及び「文化的景観とは」の執筆・写真撮影は、記載のあるものを除き、菊地淑人による。また、古写真については甲州市教育委員会所蔵のものである。